

《研究の眼》

『とりかへばや物語』小論

——中納言による今大将認識の過程——

佐藤久美

左大臣(a)には、顔立ちが似た男君(b)と女君(c)がいた。男君は内気で女君は活発であったので、社会的に性をとりかえて成長し、それぞれ男尚侍、女大将として出仕した。その後、女君は右大臣家(d)の四の君(e)と偽りの結婚をする。中納言(f)は四の君と密通する一方で、女大将が女であることを見破り強引に契り、女君は懐妊する。女君は宇治で若君(g)を出産後、失踪して吉野で男君と役割交換を果たし京に戻った。

『とりかへばや物語』巻三から四にかけて、中納言は大将が再出仕している事を聞き、宇治から失踪した女大将が男姿に戻ったと思ひ込む。以下、中納言がどのような過程を経て今大将が女大将ではなく、別人であることを認識していったかを考察したい。

中納言は、失踪していた大将が都に戻り再出仕している事を聞き、宇治で出産後姿を消した女君が、「なほさてこそあらめと思したちて出でたまひけん」(四一三)と、以前の男姿になったと思ひ込む。中納言は「まづいと見まほしく、気色もゆかし」(四一三)との思いから京に戻る。中納言にとっての「大将」は、男君ではなく、かつての「女大将」である。参内して宇治以来、初めて今大将を見た中納言は、人々に「もてかしづかれたまふさま」(四一三)に、「うち忍び隠ろへてはあいなく」(四一三)思うのも尤もだと思ひ、「いといみじくあざあざときよらにほひ、かをりなまめきたることさへ

添ひにけりと見ゆるに」(四一三)と、以前女君が女大将として出仕していた頃に比べて、新たな魅力までも加わったと考へ、別人であるとはまったく思いも寄らない。

……いかなる隙にもを言ひより気色見んと異事なく目をつけて見、れどさ思ふべしと心得て、立ち止まりもの言ひ寄るべくもあらず。
(四一四)

事情を知らない中納言は、なんとか隙を見つけて今大将に話しかけようとするが、女大将とは違うことを見破られまいとする今大将は、意識して距離をおいた態度をとりその隙を与えない。そればかりか「こと果つるままに急ぎまかでぬる」(四一四)と、公務が終わると急いで退出してしまう。

今大将の冷淡な態度に中納言は「歩きもせられたまはず」(四六八)失意の日々を過ごすうちに、四の君の乳母子の左衛門に消息して久しぶりに対面する。そこで左衛門は、また大将が四の君のもとに通い始めて「いとど去年の冬よりただならぬさまにならせたまへる」(四七一)と、四の君が妊娠していることを告げる。

御心のうちには、女君のただならぬまふらんことをうちはじめ、この人の言ひ続くことを聞きたまふにも、かへすがへす心得がたく、いかなることぞと思し乱るるに、……
(四七三)

中納言は、一筋にだにあらず、方々心得がたきことをさへとり重ね続けるに、〈中略〉なほいかで気近くて今一度ものをも聞こえ寄りて御気色をも見てしがなと思すにぞ、……
(四七四―四七五)

中納言は左衛門の話から、四の君が今大将の子供を懐妊していることを知るが、どうしても納得ができなかった。加え

て失踪した女君のことも含めてあれこれ思い悩んだ結果、もう一度今大将に「いかで気近くて」(四七五) 話しかけて様子を見たいと思う気持ちになり、「内裏などへも、大将かならず参りたまふらんとおぼゆる日は我も参り」(四七五) 続ける毎日となる。さらに、尚侍が懐妊したので今大将が宮中はずっと伺候していると聞くと、「影につきてうかがひ歩き」(四七四) 機会を伺っている有様である。

……例の、中納言は、身に添ふ影にてうかがひ歩きけるに、忍びやかに男のもの言ふけはひのすれば、ものゝ隈に立ち隠れて聞きたまふに大将の御声と聞きなしつ。
(四七八)

いつものように中納言が、大将に付きまとい歩きまわっていた夜明け、忍び声で話す男の気配がするので物陰に隠れて立ち聞きし、それが女大将の声だと思ひ込む。今大将が麗景殿の女と一夜を過ごしたことを中納言は知らないのである。

……さすがにうちまかせて逢瀬はありがたかるべきさまを、かたみに心苦しげにうち語らひて、えも出でやりたまはぬ気色を、つくづと聞きたまふに、いなや、さればこはいかなることぞ、……
(四七九)

語られる内容を「つくづく」聞くうちに、今大将が女と後朝の別れを惜しむものであったと気がつく。そこで中納言は初めて「いなや、かなることぞ」と今大将に疑惑を抱くことになる。かつての女大将は、言葉をかけてくる女性に「いとこよなくもの遠くもてをさめたまへる」(二九九) 態度で接し、「飽かぬことに思ふ人々あり」(二九九) とまでも言われるくらいに慎重に身を処していたからである。

……月ごろも、御方々の女房などにもわざとならねどものたまひふることも、年ごろのやうにまめまめしうもえも
のしたまはず、内裏の御方の中将の内侍や内侍の宰相の君などには、わざと内裏の御宿直の折、夜なども立ちとまり
語らひたまふ夜な夜なありなど人のささめくになしも、よにあらじ、ただ人の推し量りごとならんとのみ、思ひ寄ら
ざりつるを、さださだと聞きつるもあさましう夢の心地して、もし、なほあらぬ人にやと、……（四七九―四八〇）

中納言には今大将が以前のようにまじめではなく、この頃は宮中の女房にまで声をかけたり、宿直の折にはわざわざ中
将の内侍、内侍のところの宰相の君などのところに立ち寄る夜があるなどの好色心を見せているという世間の評判を信じ
難かった。しかし、今大将と女との間に語られる内容を「さださだ」と聞いた結果、「もし、なほあらぬ人にやと」疑惑を
抱くことになる。今大将は中納言が自分の視野に入っている場面では、いつも隙を見せない振る舞いをしてきたが、物陰
に隠れての立ち聞きという情況のもとで、うかつにも麗景殿の女との語らいを聞かれてしまう。これによって、声の様子
（聴覚による外形）は女大将と思われるのに、語られる内容（内実）が世間の評判になっている今大将の好色心を裏付け
るものになった。それは、かつての女大将の女性に対する慎重な扱いとは相反するものであることから、今大将が女大将
とは別人ではないかと疑いを抱き始める。今大将の前に姿を現さないことで得られた情報が、疑惑を抱ききっかけになり、
自らの疑惑を確かめるために中納言はさらに「立ち隠れて見る」（四八〇）のである。

……いみじう心苦しげなるを、やうやう明けゆく気色なれば聞きも果てぬやうにて出でたまふを見れば、まがふべく
もなき大将なりけり。
（四八〇）

しばらくして名残を残しながらも、「やうやう明けゆく気色」のなかで出て行く今大将の姿を見ると、紛れもなく女大将

なのであった(視覚による外形)。立ち隠れて聞くという行為によつてもたらされた、今大将は別人ではないかという疑惑は、今度は反対に別人ではなく女大将その人であると認識される結果となつた。一人の人物に対して、「聞くこと」と「見ること」で相反する解釈をすることになつた中納言は、混乱して隠れていた我が身を今大将の前に思わずさらしてしまふ。

あさましきに思ひのどめん方なくて、立ち出づるままに直衣の袖をひかへたれば、誰そと、おほえなくて見かへりたまへれば、この中納言なりけり。
(四八〇)

……「おのづから見し人とも思したらす、ことのほかにもて離れ思し捨て果てらるる身の恨めしさに、かくだに聞こえはべらじと思つたまへながら、……
(四八一)

驚きのあまり突然現れて直衣の袖をつかみ、(女)大将の薄情を訴える中納言に対して、今大将は後朝の別れという「かろがろしさ」(四八〇)を見られたにもかかわらず、「さりげなくもてなして」(四八〇)弁明をする。

……まことには、心のどかに聞こえまほしきことはべれど、さすがに何となき若君達なるほどこそかやうなるもつきづきしけれ、今はいとつきなきほどの位に我も人もなり登りにたれば、え聞こえぬを、おろかものに思しめしなさるるもげにことわりにはべり。怠りもわざと参りてなん申しはべるべき」とのたまへるさま、さはいへど、押しおしのけたるよそ目こそあれ、かやうに近やかにてもものなどのたまへるには、まことの男はまたしるきわざなるを、かへすがへすあやしくて、……
(四八一)

今大将は中納言に、自分もおちついて話したいことがあるが、現在のお互いの立場では立ち話もふさわしくない。自分

のことを中納言に、「おろかなるもの」と思われるのも最もなことであるので、改めて参上して事情を説明するつもりであると言ひ、あくまでも今大将は、中納言に対して女大将であるという態度をとり続ける。それに対して中納言は今まで、今大将を「よそ目」で見て女大将だと思ひこんできた。一方で今大将は中納言に女大将とは別人であることを見破られなために、中納言を意識的に遠ざけて接する機会を与えてこなかった。そのために、中納言は距離をおいた所から今大将の姿を見て、女大将だと思ひこんでいたのである。しかし、今「かやうに近やか」な位置で話をしている今大将を見て、かつての女大将ではなく「男」であつたと気がつく。中納言は初めて近距離で今大将に接し、「話す」行為も加わつた状況のもとで今大将が「まことの男」であると認識せざるを得ない。そして、中納言は、今大将が実際には男でありながらも女大将のように振る舞う訳も何度考えても理解できずにその場に立ちつくすことになる。

……やうやう明けはなる空の気色くもりなきにつくづくと見たまへは、御髭のわたりなどことのほかに気色ばみにけるも、いなや、こは誰そ、さらばありし人はいづちへ失せたまひにしぞと、かへすがへす心得がたくて……

(四八二)

中納言は今大将が男であつたことがまだ納得できない気持ちもあり、夜が明けてゆく明るさのなかで改めて「つくづく」と間近に今大将を見ると、髭のあたりに男である特徴を見つけ、「いなや、こは誰そ」と、別人であることを確信するにいたる。それとともに今度は今大将が誰であるのか、そして、「ありし人はいづちへ失せたまひにしぞ」と、かつての女大将の行方に疑問を抱く。

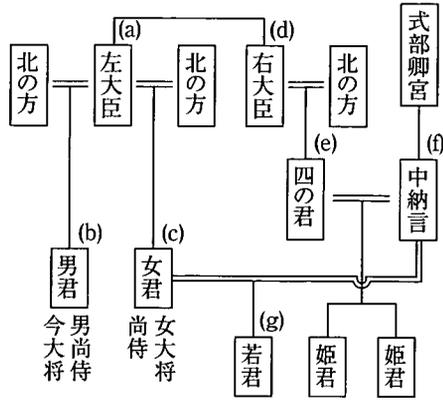
中納言の疑惑は、物語が展開されていく場面の順に強まっていくのではなく、その場面の状況のなかで気持ちが揺れ動きながら、徐々に核心にせまっていき、その結果、今大将を女大将とは別人であると認識する。

それでは何故、中納言はこのように気持ちをやれ動かしながらでしか、今大将を女大将とは別人であると認識できなかったのだろうか。宮中で今大将を見ている中納言は、女大将の再出仕と思いきんでいた。しかし、左衛門の、四の君が今大将のこともを懐妊しているという話に不審をもち、真相を確かめようと今大将につきまとう中で今大将が女と語っている場に遭遇する。私的場面での今大将の会話を立ち聞きし今大将が男であったという予想外の展開に驚き、中納言は今大将の前に姿を現す。初めて近距離で今大将を見た中納言は、男であると気がつきながらも今大将が女大将であるという思いを否定できず、即座には別人であるとは受け入れられないのであるが、見ていくにつれて今大将に男の特徴を見つけ、女大将とは別人であると認識せざるを得ない。今大将という一人の人物に対して中納言は、公的場面では女大将であると認識しながらも、私的場面で見えた結果は男であったという相反した状況のなかで、中納言自身が気持ちを揺れ動かしながらも、次第に別人であるという結論にいたったのである。

また、今大将が自分の正体を明かさなかつたことで、中納言は今大将が誰であるかを追及する機会を失くしたことになる、今後今大将の正体が露見することはない。

中納言が、再出仕した今大将を女大将とは別人と認識していく過程を仔細に見てきた。中納言は（女）大将に接する機会を得ようと今大将につきまತ್ತたが、意に反して今大将が別人であるという結果を得た。それによって、吉野の存在を知らない中納言は、男君と女君の入れ替わりまで考えが及ばず女君を探す手がかりを絶たれたことになり、物語としては、これにより女君との関係が終息したといえるのである。

人物関係図



※ 引用本文は新編日本古典文学全集所収『とりかへばや物語』小学館／二〇〇二年による。

(大学院聴講生)